

大学教育が個の「自立」を促し 社会的不安を克服する



清成忠男

法政大学学事顧問(法政大学前理事長・総長)

高校生から社会人まで、若者に社会的不安の連鎖が広がっている。こうした傾向は、わが国において特に著しい。こうした事態に大学はどう対応すべきか、教育はどのような役割を果たすべきか。

1 若者の挑戦

若者は、総じて何事かに挑戦しなくなっているという。特にこの10年こうした傾向が強まっている。例えば、外国に留学したいという意欲が低下している。商社に就職しても外国に赴任したがる、組織から独立して自らの企業を起こしたがる、等々、変化を好まなくなっている。不確実性に対応してあえて事を起こす。こうした傾向が社会的に弱まっているようである。

その理由として、若者が将来に希望を見出せなくなっているからだという主張がある。社会の各分野のトップが明確な全体ビジョンを提示すれば、若者にも希望が出てくるということになる。

果たしてそうであろうか。例えば、政治のトップが国家ビジョンを提示すれば、若者の志向に変化が生ずるであろうか、とてもそうは思えない。

現在は、歴史的な転換期である。若者にとって先き行き不透明であり、予測が困難である。モデルになる

ものも存在しない。その結果、どうしても、社会的不安は大きくなる。教師や親に相談しても、納得のいく回答は期待できない。こうした状況にどの教育機関もまだ本格的に対応していない。

ところで、現時点の社会的変化は、近代からポスト近代へ、工業社会から知識基盤社会へといった変化が基礎にある。しかも、わが国にとっては、欧米といった先進モデルはもはや存在しない。わが国独自のモデルも確立されていない。

のみならず、かつて経験したことのない少子高齢社会が到来している。それは、人口減少社会への移行でもある。2009年10月1日現在のわが国の推計人口は、1億2751万人である。中位の将来人口推計をみると、2020年1億2313万人、2030年1億1585万人、2040年1億658万人、2050年9633万人と推移する。2010年から2050年までに、3093万人、24.3%減少する見込みである。65歳以上の高齢者の比率も、2020年29.2%、2030年31.7%、2040年36.1%と上昇し、2050年には39.1%に達する予想である。社会保障費の著しい増加、若い世代の負担増は明らかである。

ただ、高齢者の比率は、地域差が大きい。2009年10月1日現在では、全国平均は22.7%だが、島根県は29.0%、秋田県は28.9%と格段に高い。過疎化が進んでいる町村や集落はさらに高い。しかし、高齢者の伸びは、埼玉県、千葉県、神奈川県、愛知県、大阪府、奈良

県、東京都などにおいて大きい。2035年には、高齢者の51.2%が3大都市圏に集中すると予測されている。

当然、労働力人口も減少傾向をたどる。働き方にも大きな変化が生ずる。とりわけ福祉サービスの需要が拡大する。この分野での質の高い専門人財の形成が重要な課題になる。福祉事業も大きな伸びを示す。とくに医療や介護などのサービスを地域レベルでシームレスに統合する事業の必要性が全国的に拡大する。それに伴い、多様な専門人財の養成が不可欠になる。

さらに、2007年に始まった金融・経済危機をきっかけに、経済のパラダイム・シフトが始まった。ライフ・イノベーション、グリーン・イノベーションが政策的に推進され、産業構造の転換も急速に進む。輸出も、新興国を中心とするインフラ産業を戦略的に伸ばすことになろう。人財面でも、業種横断的なシステム産業で活躍する新しいタイプの専門人財が求められることになろう。

そして、経済のグローバル化のより一層の進展によって、労働市場の内外一体化も進む。知識集約的な高度人財が各分野で求められる。他方、新興国と同レベルの単純労働の分野では、賃金は低く据え置かれる。二極分化が進むのである。組織と個人の関係にも変化が生ずる。いずれにしても、最近では、組織が個人を保護する度合いが低下する傾向にある。非正規雇用の増加などを見れば、この点は明らかであろう。

時代の転換期には、先き行きの不透明性が増し、しかもかつてのような将来を見通したモデルももはや存在しない。転換期には、社会的不平等も拡大する。そうした現象は、テレビで増幅され放映される。若者の不安感もまた拡大する。

2 高校生

現在の高校生は、何となく不安を抱えたまま過ごしていると思われる。受験勉強をしているにせよ、スポーツ等に熱中しているにせよ、漠然とした不安にかられているようである。彼らは不況下で育っている。2008年のリーマン・ショック後の急激な景気後退も、

テレビ等で断片的に知っている。

様々な社会的不平等も、テレビ等を通じて、現象には接近している。身近に感じる場合もあろう。

ニート、フリーター、ホームレスなどを目にすることは少なくない。失業、貧困、生活保護などの存在も知らないはずはない。2008年末の派遣切りのようなショッキングな出来事は、いやでも目に飛び込んでくる。オレオレ詐欺や殺人など、犯罪の多発化も、日常的に知っている。

これらの現象の理由や社会的背景は理解できないにしても、現象は気になっているはずである。高校生が不安感をもつことは、当然の結果である。

問題は、こうした社会的現象が、しばしば、個人の責任に帰せられるということである。失業や貧困の原因が、個人の責任に求められる。個人に責任が全くないとはいえないにしても、企業のあり方や雇用に関する制度など社会的背景にも目を配らなければならない。

それにしても、個人の責任を追及する場面がテレビで放映される場合があるし、高校生が「個人がしっかりしなければ……」という感想をもっても不思議はない。不安感をもつのも当然である。

だが、個人がしっかりするためにはどうすればよいか、誰も教えてくれない。高校生が自己の判断力を強めようと思っても、教師はどう対応すべきか、どの程度問題の所在を理解しているのであろうか、キャリア教育も本来の役割を果たしていると思えない。

これでは、高校生は的確に進路選択を行うことはできない。将来設計も先送りせざるをえない。現実には、高校生は不安を抱えたまま受験勉強に追い込まれる。とりあえず、どこかの大学に入ることになろう。有名大学に入れば、多少はリスクが低下することを期待する。明確な目標がないまま、大都市の大規模大学に志願者が集中するという傾向が続くことになる。

3 大学生

大学に入っても、前述のような不安が消えるわけではない。将来に対する不安は依然として続く。不安を

除去するために何を学ぶべきか、学生は自分では明確に判断し難い。それでも、学部・学科の選択が的確であったかどうか、問い直さざるをえないケースが広がっていると思われる。

もっとも、最近では、キャリア教育が重視されるようになってきている。ただ、問題意識が明確でなく、的はずれであるように思われる。多くの分野で将来のモデルは見当たらず、先が読めない。だが、大学における学習を通じて、個人の就業上に生じた問題の社会的背景がある程度理解できるようになってくる。それでも、対応の方法がただちに見つかるわけではない。それだけに、学生の不安はかえって増幅されることになる。

ただ、学力、学習意欲、社会観などのうえで、学生のバラツキは、以前よりかなり大きくなっている。したがって、不安の感じ方や対応の仕方は様々である。画一的に問題の解決を論ずることはできない。

問題は、学習に要する時間の余裕がないまま、就職活動に追い込まれる。将来設計や進路選択にあたっては、考える時間や準備が必要なはずである。進路選択の基準が明確でないまま企業回りを行うことになる。そうすれば、学生はどうしても無難と思われる選択を行うしかない。さしあたり、安定しているように見える大企業を選択することになる。だが、もちろん安定の保証はない。転換期であるだけに、業種の如何を問わず、企業間格差が拡大している。これからは、グローバルな企業間競争も新しい段階に移行する。どのような企業に就職しても、個人のリスクは避けられない。個人の安定志向は、かえって不安定になりかねない。

そこで、どのような立場におかれても、個人は自立志向を重視せざるをえなくなる。自立のためには、社会的に通用する専門能力を身につけなければならない。その準備を学生時代に始めることが必要である。就職活動の前に、思考力、判断力、コミュニケーション力をきたえることが重要である。まず、個人としての自立を目指すことを意識しなければならない。

もちろん、自分自身の企業を起こすという選択もありうる。創業は、アメリカや中国においてはかなり活発である。わが国においても、創業はかつてはきわめ

て活発であった。

だが、わが国では、最近、創業は低調になり、中小企業数は急激に減少している。新産業の創出や経済の刷新も進みにくくなっている。長期的な不況のなかで、若者の創業意識は総じて弱まっている。にもかかわらず、経済の活性化のうえで、創業はきわめて重要である。

4 社会人

大学生は、将来の方向に確信がもてないまま、企業等に就職する。したがって、企業に就職しても、将来について不安が消えない者が多い。仕事について、個人の意識と企業の意向が一致しない場合も少なくない。その結果、中途退職に至る場合がしばしば生じている。

さて、最近では、新人研修について、企業は以前程の余裕を有していない。内容的にも、企業の研修には少なからぬ限界が存在する。他方、大学卒業生数は年々増加している。1989年には377千人であったのが、1999年には532千人へと増加し、2009年には560千人に達している。20年間に48.5%も増加している。学力等で、学生のバラツキはかなり大きくなっている。もちろん、企業は能力の低い者は採りたくない。能力の高い者を採用し、短期間に仕込むといった傾向が強まっている。もはや甘やかしている余裕はない。

そして、企業側は社員にキャリアパスを提示するようになってきている。キャリア形成の道筋が見えるようにしている。のみならず、キャリア教育をも行っている。だからといって、個人は必ずしも先が見えるようになるわけではない。企業の先行き自体が明確であるとは限らない。

むしろ、個人の企業内自立といった動きも見られる。個人は自ら専門能力を身につけ、自立を志向する。個人は企業を相対化し、主体的にキャリア・デザインを行うようになる。必ずしも定年まで勤めようとは思わない。企業は個人を抱え込めなくなっている。個人を長期にわたって保護することは、企業にとってはリスクな面がある。個人が企業内自立を実現すれば、個

人と企業間に緊張関係が生まれる。だが、自立した個人は、企業にとって強い戦力になる。組織そのものも、官僚的な機能別組織を脱し、変化対応型へと脱皮していく。知識基盤社会における速い変化に対応するために、組織も個人も変化せざるをえないのである。

産業の形も、業種横断的なシステム型が主流を占めることになりつつある。異質人財の交流が重視され、企業人には高度のコミュニケーション能力の向上が求められる。

いずれにしても、個人は仕事を通じて多面的な専門能力を統合して蓄積し、自立の基礎にする必要がある。自立を進める過程で、将来に対する不安はしだいに克服されることになる。先行き不透明であっても、変化に的確に対応できるようになろう。当然、そのための準備が必要になる。

5 大学の役割

不安克服のキーワードは、「自立」である。「自立」のための準備を大学でどこまで教えられるか。「自立」とは他者依存からの離脱を意味する。自分の道は自分で切り拓く。「自立」によって、何があっても生き抜く力を身につける必要がある。したがって、「自立」は主体性の問題である。個人の主体的な学習がきわめて重要である。大学の役割は、「動機づけ」を行うことである。

「自立」のためには、個人をきたえる必要がある。強い個をつくるのである。自分の運命は自分で決めるという状況をつくり出す必要がある。とにかく、組織や集団への依存から個人の主体的選択を尊重する必要がある。

これは、必ずしも抽象的な「個の確立」を意味するものではない。変化・不確実性の時代であるからこそ、個人の適応力が重要なのである。社会がどのように変化しようとも、個人が生き抜くためには、思考力、理解力、判断力が不可欠である。

現実には、まさに逆である。学生は過保護の状況にある。「自立」は好ましくないと見られ、敬遠される。学生達は仲間をつくり、もたれ合う。集団のなかに「居場

所」を見つけるのである。いわば集団のなかに埋没し、安心することになる。そうでなければ、仲間外れになることが懸念される。学生食堂で一緒に食事をする「食べ友」の不在が学生達を悩ませているという。「友達がいない」と他人に思われることが辛いのである。

「自立」は孤立を意味し、「自立」は否定される。学生の多くは、あえて変化に挑戦しない。「ポスト堀江」世代の学生は、ベンチャーを創業したがないという。逆に、ニートや引きこもりが一定の割合で存在する。これまではそうした存在を親が許容してきた。しかし、それが長期化すると、親が経済的に許容できなくなる。大学の役割があらためて見直される。

さしあたり必要なことは、大学における「自立」のための動機づけである。ただ、現実のキャリア教育が「中途半端な職業教育」であるとすれば、あまり意味がない。むしろ、抽象論でなく、職業や勤労を具体的に経験させることが、「動機づけ」としては有効である。教育手法においても、切り口を変えた工夫が必要なのである。フィールドワークで現場を知り、実践的に問題解決を試みさせる。ささやかであっても、問題解決の達成経験のくり返しをはかる。それによって、しだいに「自立」を体得していく。

また、ヘテロジニアスな集団を形成し、問題解決に参加させる。異質人財の接触・摩擦による知的創造の過程を経験させるのである。それによって、高度のコミュニケーション能力をきたえる。結果として、職業観や勤労観が自ずと形成される。

さらに、自己の行動について、個人としての責任を自覚させる必要がある。「自立」と自己責任は裏腹の関係にある。

社会的不安の連鎖を断ち切るのは、大学教育である。大学は、一方では高大連携、他方では社会教育によって、個人の「自立」を促進することができる。大学による教育の連鎖が、社会的不安の連鎖を断ち切るのである。こうした教育の意義を大学が自覚し、拡充することが重要である。